

アウトリーチ

通信



第17号

2011年3月20日発行
年2回発行

神戸女学院大学音楽学部
アウトリーチ・センター

子どものための コンサート・シリーズ

クリスマス・コンサート

十二月十一日(土)、本学講堂において「子どものためのクリスマス・コンサート」～みんなですごそう♪音楽いっぱい～のクリスマスマス(子どものためのコンサート・シリーズ第三十回)を行いました(第一部十一時、第二部十六時開演、各六十分、来場者数計七百八十名)。

今年からこのコンサートは企画案を公募し、オーディションによって出演グループを決定することになり、「音



楽によるアウトリーチ」既習生を含む私たち七名が選ばれて出演しました(ピアノ・井上香菜、杉原真弓、山本佳苗、声楽・松本真奈、奥田敏子、フルート・河田菜摘子、ホルン・大石圭奈子、司会・山本佳苗)。私たちは、クリスマス本来の意味を尊重した上で、特色のある楽器を交え、音楽のもつ魅力や感動を会場が一体となって味わえるコンサートをめざしました。

コンサートの始まりを告げるのは、柔らかなトーン・チャイムの響きです。幕の前でスポットを浴びた司会者が、イエス・キリストの生涯とクリスマスの由縁を語ります。幕が開くと同時に、キリストの生誕を祝してヘンデル《メサイア》より《ハレルヤ・コーラス》を出演者全員で歌い上げました。続いて、聖母マリアを崇める曲として有名な《アヴェ・マリア》

を、バッハ作曲グノー編曲のもの、シューベルト作曲のものを、声楽二人が二曲続けて歌いました。次にビゼーのピアノ連弾曲集《子どもの遊び》より《メリーゴーラウンド》と《舞踏会》を息のあつた演奏で披露し、連弾の楽しさを味わってもらいました。



曲が終わると、後方の会場入り口が開き、外からの光に包まれてフルートとホルンの奏者が入場し、ピアノとの三重奏で《牧人ひつじを》を奏でながら、客席通路をゆつくりと進んで舞台へ上がります。

ここで楽器紹介です。フルートはもともと木で造られていたこと、一本を三つに分けて頭部管のみでも音を出すことができること、ホルンは狩りで使われていた名残でベルが後ろ向きについていること、ベルが後ろを向くか前を向くかで音の大きさが違うことを、実際に舞台で確認しました。この二つの楽器は音域や吹き方が異なりますが、空気を震わせて音を出す点は同じで、人の声も同じであることをお話しました。

続いて、ドップラーの《リギの想い出》を四重奏で演奏し、特注のチューブラー・ベルも加わって、個性的な音色が溶け合います。

コンサートも後半に入り、子どもたちの参加コーナーです。ヨハン・シュトラウス二世《トリッチ・トラッチ・ポルカ》の陽気なリズムに乗せて、歌詞に合わせたポーズをとる遊びをしました。お隣の人の肩をトントン叩く動作を入



れて、皆で触れ合いを楽しみました。次に、会場の皆様と一緒にクリスマス・ソング四曲をメドレーで歌い、子どもたちの可愛らしい歌声に、出演者も力一杯歌いました。(シングル・ベル)ではテンポ・アップするにつれて熱気が高まり、会場全体が一つになって私たちが出演者も感動しました。

最後に、大切な人と一緒に聴きに來てくださっている皆様に、「神様は私たちに愛すること、愛されることを教えて下さった」という内容の讃美歌(ホーリー・ホーリー・ナイト)をお届けして、コンサートを締めくくりました。

終演後の楽器体験コーナーでは、珍しいナチュラル・ホルンの展示も行い、それぞれの楽器に挑戦した子どもたちは満足した様子でした(ホルン、パイプ・オルガン、トーン・チャイム、ピアノ、フル



ート)。

来場者アンケートでは「もっと聴きたかった」「毎年聴きに來ていますが、今までで一番楽しいコンサートでした」といった声を頂きました。コンサートで聴いたメロディーを子どもが終演後口ずさんでいたといったうれしい話も聞きました。

コンサートの準備段階では、出演者のスケジュール調整や舞台上の流れの改善など、メンバーが積極的に意見交換をすることで、完成まで打ち込むことができました。また、思い出ある母校に学友が集い、充実した時を過ごしました。津上先生、澤内先生を始めとする先生方の学生時代と変わらない丁寧なご指導、スタッフの皆様のご強いご支援に出演者一同感謝しております。このような貴重な機会を頂き、すばらしい経験を積むことができましたことに、心から御礼申し上げます。

(山本佳苗・記)



オーディション制となった「子どものためのクリスマス・コンサート」

「子どものためのコンサート・シリーズ」を始めて、この夏でちょうど十年になります。その間、いろんなことがありました。悲喜交々で、いろいろな人の顔が浮かんできます。

「子どものためのクリスマス・コンサート」もその間に大きな変化がありました。最初の年は「音楽によるアウトリーチ(実習)」履修の四年生が出演しましたが、年明けの卒業演奏試験を控えた時期に大きなコンサートをするのは無理があることが分かり、翌年からは直近の卒業生が出演することとしました。

ところが二〇〇九年十二月のクリスマス・コンサートで、出演者の意識に甘えがあることを強く感じ、システムを改めることにしました。それが公募制であり、オーディション制でした。具体的には、春に「子どものためのクリスマス・コンサート」の企画を募り、六月末日で締め切って、七月の教

授会で選定し、九月下旬にオーディションを行って演奏レヴェルのチェックを行うという形に改めました。

このシステムを昨年、初めて実施したところ、その結果は目覚ましいものでした。自分たちで決めて応募する、選ばれて舞台に乗るというプロセスを経たことで、出演者たちの意気込みがまったく違っていました。覚悟と責任をもつて準備を進め、舞台に臨んでくれました。

澤内崇先生や榎田雅祥先生からも選曲や曲間の流れ等について具体的な助言を頂いて、出演者たちは入念な準備を行い、完成度の高い舞台を実現してくれました。

今年の「子どものためのクリスマス・コンサート」(十二月十一日)も公募制で進めたいと思います。応募の締切は六月末日です。詳細はアウトリーチ・センターまでお問い合わせ下さい。

津上智実
(アウトリーチ・センター長)

学外アウトリーチ

夙川幼稚園

九月十六日(木)、西宮市立夙川幼稚園(西宮市松ヶ丘町九の二十三号)の「秋のコンサート」(二十五分、二回公演)に出演しました(声楽・松井るみ、森田紋加、ピアノ・藤波真理子、山下恵里奈、ピアノ&ウッドブロック・濱野恵里香、ピアノ&クラリネット・矢嶋杏里沙、フルート・宮永佳代子)。

幼稚園児が対象なので、子どもたちに耳なじみのある曲で楽しんでもらうこと、そしてクラシック音楽の魅力を伝えることを目的としてプログラムを作成しました。開幕は「クラリネットをこわしちゃった」。歌とピアノの伴奏に、クラリネットを加えて演奏しました。クラリネットが登場すると、子どもたちは興味津々。

次に、クラシック音楽を三曲。初めにベートーヴェン(交響曲第七番)第一楽章をピアノ連弾で演奏しました。連弾で音の厚さを出すことができましたが、少し飽きてしまった子もいた様子で、もっと工夫が必要だと分かりました。次はモーツァルト(トルコ行進曲)。ピアノ・ソロにフルートと歌の二重唱を加えて、子どもたちをうま

く惹きつけることができました。続いてアンダーソン(シンクペーテッド・クロック)。この曲ではウッドブロックを用い、子どもたちにも一緒に手拍子をしてもらいました。参加することですべて

感が生まれ、とてもよい雰囲気でした。

ここで、ジュブリの曲から(さんぽ)と(崖の上のポニョ)を挟み、最後は立ちの曲(タイム・トゥ・セイ・グッバイ)を出演者全員で演奏して締めくくりました。

初めての学外実習だったので、しっかり準備を重ねて臨みましたが、実際にやってみると、舞台のないフラットな会場でどう動いたらいいいのか戸惑うこともありました。今後の課題も多く見つかり、幼稚園コンサートの楽しさとむずかしさを実感しました。

(松井るみ・記)



神戸市立医療センター中央市民病院

九月十六日(木)、神戸市立医療センター中央市民病院(神戸市中央区港島中町四の六)の院内コンサート(四十分)に出演しました(声楽・三柴広子、フルート・曾田友子、松田春香、ヴァイオリン・秋田紗奈江、ピアノ・遠藤麻子、小林聡子)。

私たちにとって初めての学外実習だったので手探り状態でしたが、病院に入通院されている方々がお客様なので、クラシック音楽に加えて季節を感じさせる曲や耳なじみの曲を入れたり、音楽に合わせて体を動かすプログラムを組み込んだりしました。

まずフォーレ《シシリエンヌ》、プッチーニの歌劇《ジャンニ・スキッキ》より「私のお父さん」を聞いて頂き、次にフルートで山口景子編曲《秋メドレー》(紅葉・里の秋・まつかな秋)を演奏しました。一緒に口ずさんで下さるお客様も多く、続く山田耕筰《赤とんぼ》も思っていた以上に歌って下さったので、大変うれしく思いました。

「体を動かそう」のコーナーでは、《カヴァレリア・ルステイカーナ》の《間奏曲》に合わせてストレッチをし、《大きな栗の木の下で》を歌いながら体を動かしました。

た。

始めは少し表情の固い方もいらっしやいましたが、歌ったり体を動かしたり、時間が経つにつれてお客様の表情が変わっていくのがよく分かり、始まり、緊張していた私たちも、だんだん楽しく演奏できるようになり、コンサート終了後、お客様のお見送りをしていたら、「感動したよ」「本当にありがとう」「今日は来てよかった」などたくさんのおいしい言葉を頂きました。中には明日手術を控えている方もあり、「パワーをもらいましたおかげさまで明日がんばれそうです」と声をかけて頂いて、音楽にはすごいパワーがあるなど改めて感じました。この実習でアウトリーチ活動のよいスタートが切れたと思います。



(小林聡子・記)

九月二十二日(水)、兵庫中央病院(三田市大原一三四)の「オクタムコンサート」(四十五分)に出演しました(声楽・綾野聖子、フルート・古山友貴、曾田友子、ピアノ・小林聡子、丹波友里、恒岡朋代)。

前回の実習(十六日・神戸市立医療センター中央市民病院)とほぼ同じ出演メンバーだったので、少し曲を入れ替えたり加えたりしてプログラムを組みました。

まず季節の曲として、成田為三「浜辺の歌」をフルート二重奏とソプラノ独唱で、次にフルートで秋の曲メドレーを演奏して、夏から秋へと移り変わる季節を感じて頂ける構成にしました。次の山田耕筰「赤とんぼ」まで、一緒に歌って下さる方も多数ありました。続いてフルート独奏でエルガー「愛の挨拶」、ピアノ連弾でハチャトウリアン「仮面舞踏会」を演奏しました。

満身に体を動かせない患者さんも多く、大半が車いすやストレッチャーで来られていたので、「体を動かそう」のコーナーでは「カヴァレリア・ルステイカーナ」の(間

奏曲)に合わせて

ストレッチをした後、(むすんでひらいて)で手を上下左右に動かしたり、開いたり閉じたりする運動をするのことにしました。テンポを変えなどの工夫をすることで楽しんで頂けたと思います。

岡野貞一「ふるさと」をお客様と一緒に歌い、最後にアーレン「虹のかなたに」を出演者全員で演奏しました。涙を流しながら聞いて下さった方、「普段全く声を出さないと」言われる患者さんが声を発していたり、私たちの音楽が伝わっている様子が分かって、とてもうれしく思いました。思うようにいかなかった点もありましたが、その反省を今後の実習に生かしていきたいと思えます。



(小林聡子・記)

十一月二日(火)、西宮市立春風幼稚園(西宮市今津野田町二の六)で園児を対象とする「秋のコンサート」(四十分)の実習を行いました(フルート・砂川奈穂、ピアノ・恒岡朋代、山下恵里奈、ピアノ・パーカッション・濱野恵里香、声楽/トランペット・三柴広子、ピアノ/クラリネット・矢嶋杏里沙)。

音楽の多様なおもしろさを伝えることを目標に、「楽器の音色」「リズム」「強弱」の三つを感じてもらえるプログラムを考えました。まずは「楽器の音色」を知ってもらうために、歌とピアノにクラリネットを加えた「クラリネットをこわしちゃった」、ピアノ連弾にトランペットを加えた「軍隊行進曲」、ピアノとフルートによる「星に願いを」を演奏しました。次に「どんぐりころころ」(虫の声)「とんぼのめがね」の三曲を園児と一緒に歌いました。

次は「リズム」です。オッフエンバック《ホフマン物語》の(オランピアの歌)で三拍子を、ベーターヴェン《交響曲第七番》第一楽章で符点リズムを、アンダーソン《シンコペーテッド・クロック》

でシンコペーションのリズムを、それぞれ子どもたちに手拍子してもらいました。(オランピアの歌)では、人形にネジを巻く演出にも園児に参加してもらいました。

三つ目は「強弱」。ピアノ連弾によるシュトラウス作曲「ラデツキ一行進曲」で指揮者役がフォルテとピアノを指示し、これに子どもたちも手拍子で参加しました。

最後に復習として、今日出てきた三つの楽器の名前を確認しました。

幼稚園実習が二度目のメンバーも多く、園児との接し方もより自然になって、前回の反省を活かすことができました。見学の三年生が響きの確認や運搬を手伝ってくれたのも、よい結果に繋がりました。



(濱野恵里香・記)

野木病院

十一月二十日(土)、野木病院(明石市住吉町長坂)の「ウインターコンサート」(六十分)に出演しました。(フルート・曾田友子、ヴァイオリン・井上佳那子、声楽・松井るみ、ピアノ・小林聡子、矢嶋杏里沙、藤波真理子)

これまでの実習経験から、プログラムは季節感を感じさせるもの、幸せな思い出に浸れるもの、聴いてうきうきするものがよいと考えて、全員で相談しながら曲を選びました。

まずフルート独奏でヘンデルの歌劇《セルセ》より《オンブラ・マイ・フ》。この曲は昔テレビ・コマーシャルでキャスリーン・パトリが白いドレスで歌っていたことで有名になりました。次は、ヴァイオリン独奏でエルガー《愛の挨拶》。この曲の優美な旋律をお客様へのご挨拶としてお届けした後、ソプラノ独唱で越谷達之助《初恋》と中田喜直《霧と話した》を続けて歌いました。どちらも静かに昔の恋を語るような曲で、会場の雰囲気もしっとりしたところで、アメリカの作曲家ミーチャムの楽しい行進曲《アメリカン・パトロール》をピアノ連弾で演奏しました。野木病院にはピアノがなく、電子

ピアノを運び込んで演奏しましたが、普段弾き慣れているピアノとはタッチも響きも異なる電子ピアノで演奏するのは大変でした。

コンサートも中心が踊った後はマスカリーナの歌劇《カヴァレリ



ア・ルステイカーナ》の《間奏曲》にのせて全員で体を動かす体操をしました。

続いて山口景子編曲《冬の日本歌曲メドレー》をフルート独奏で演奏し、その中の二曲《たき火》と《雪》に加えて、《北風小僧の貴太郎》《上を向いて歩こう》を全員で歌いました。プログラムに歌詞を載せて、聴衆の皆様にも一緒に歌って頂き、共に音楽することによって生まれる一体感を感じることができました。

次はソプラノ独唱でロッシニー《踊り》。タランテラのリズムにのせて歯切れよく、激しいダンスの

様子を歌う曲です。最後は演奏者全員でヴェルディの歌劇《椿姫》より《乾杯の歌》を演奏しました。お客様が笑顔で聴いて下さったり、手拍子をして下さったり、音楽による素敵なコミュニケーションを感じることができて、幸せな一日でした。(松井るみ・記)

長吉総合病院

十一月二十五日(木)、長吉総合病院(大阪市平野区長吉長原一の二の三四)の「ウインターコンサート」(六十分)に出演しました。(フルート・曾田友子、ヴァイオリン・井上佳那子、声楽・松井るみ、ピアノ・丹波友里、浜野恵里香、前田彩華)。

この病院は今年初めて実習先に加わったところです。過去の資料もなく、先輩に話を聞くこともできずに実習に行くのは初めてで緊張しました。そこで、直前の野木病院の実習とできるだけ同じメンバー、同じプログラムとすることにしました。その分、前回よりも練習時間がたくさん取れて、個々の曲について深く考えることができました。

ここは院内コンサートの経験がまだ一度しかない病院だったので、当日は演奏する位置や向きを決定

も任され、初めての経験に戸惑いました。病院ロビーでのコンサートだったため、リハーサルを本番と同じ場所で行うことができず、別室での演奏リハーサルと会場での立ち位置のリハーサルを分けて行いました。舞台もなく、複数の通路とつながっているのが音が抜けてしまうなど、演奏者にとってはむずかしい環境でした。アウトリーチでは聴衆に合わせたプログラムを考え



るだけでなく、会場の響き具合で演奏方法を変えるなど、いろんなことに敏感になる必要があることを学びました。本番では病院スタッフを始め、たくさんのお客様が聴いて下さって、コンサート作りのむずかしさを再認識すると共に、みんな悩んだ分、喜んでもらえる幸せを感じた一日となりました。(松井るみ・記)

十二月十五日(水)雲雀丘学園小学校(宝塚市雲雀丘四の二の一)で五年生四クラスを対象とするアウトリーチ実習を行いました(フルート・佐野里穂、石原奈緒美、古山友貴、砂川奈穂、曾田友子、ピアノ・遠藤麻子、小林聡子)。

今回の実習は「フルートに興味を持ってもらおう」をテーマに、チャイコフスキー《くるみ割り人形》より《葦笛の踊り》(フルート三重奏)を導入として、その後、ヘンデル《ラルゴ》と(フルートとピアノ)、モーツァルト《フルート協奏曲第二番ニ長調》(同)、ヴィドゥ奏曲第二番ニ長調》(同)、ヴィドゥール《フルートとピアノのための協奏曲》より終楽章(同)、ショッカード《空中散歩 Airborne》(同)、《大忙しのサンタ BUSY SANTA》(フルート五重奏と様々な時代のフルート作品を順に演奏し、最後に楽器体験コーナーを行いました。最初、四クラス各四十五分で実施と聞いた時は驚きましたが、実際にやってみると各クラスで生徒の反応が違い、回を重ねる度に私たちもいろいろと学んで成長する



する姿を見て、とてもうれしく思いました。

実施に至るまで、曲目構成にいろいろと変更があったり、悪戦苦闘したこともありましたが、その経験も含めて、全てが貴重な経験となりました。この経験を今後の演奏活動に活かしていきたいと思えます。(石原奈緒美・記)



ことができま

した。どのクラスも生徒たちの反応がとてもよく、私たちが助けられた部分が多々ありました。演奏を集中して静かに聴いてくれたり、体験コーナーで楽しそうに楽器に触れたり

スペシャル・コンサート

「三大学饗宴!子どものためのスペシャル・コンサート」音楽で広がるイメージの世界」を十月十六日(土)十五時から講堂で開催しました(来場三百三十名)。

これは二〇〇九年秋にスタートした三大学連携による教育プロジェクト(文部科学省の戦略的連携支援プログラム選定「音楽連携による教育イノベーション」音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて)の一環として、三大学(東京音楽大学、昭和音楽大学、本学音楽学部)が協力して実施したものです。

このコンサートは、三大学がそれぞれの持ち味を生かしながら、全体として一つの共通コンセプトに貫かれた舞台を作り上げようとするもので、およそ一年前から三大学教員の話し合いをスタートさせ、新年度に入ってから学生たちのディスカッションなどを重ねて準備を進めました。遠隔地間の話し合いにはインターネット・ビデオ会議システムやメール・リンク・リストを活用し、九月に東京音楽大学で行った三日間の夏期合同研修でも話し合いの場を持ちま

した。

まず、コンサート全体の副題を「音楽で広がるイメージの世界」と定め、音楽のもつ広大で豊かなイメージの世界を子どもたちに体験的に感じ取ってもらうことを目的として、企画を進めました。出演は三大学の学生たちで、分かりやすいお話しを交えながら、それぞれが三十分ずつの演奏を行うこととしました。



プログラムの第一部は、昭和音楽大学の歌とピアノによる「水と光のイメージ」で、ロッシェーニ《競艇前のアンツレータ》、ショパン《雨だれの前奏曲》、ドニゼッティ《シャモニーのリンダ》より《この心の光よ》等を演奏しました。大学院生の迫力のある声(ソプラノ、メゾ・ソプラノ、テノール)に子どもたちも惹きつけられていました。第二部は、本学音楽学部のフル

「子どもためのコンサート・シリーズ」のきっかけとなった「楽器で遊ぼう！～子どものための体験コンサート～」が本学講堂で開催されたのは 2002 年 3 月 9 日。その年の夏にスタートした本シリーズは、七夕コンサート、スペシャル・コンサート、クリスマス・コンサートの年 3 回を基本に継続してきました。皆様に支えられて、昨年 12 月に第 30 回を迎えました（この間の来場者数は合計 16,703 人）。これまで十年間の歩みを振り返ります。

子どものための七夕コンサート：7月最初の土曜日、2回公演、4年生の



第 4 回

第 1 回 2002 年
(合奏室、196 名来場)
フルートとハーブの音で
クラシック曲から映画音楽
まで。
笹を会場に飾るのは、
この時からの伝統です。



第 1 回

第 4 回 2003 年
(音楽館ホール、256 名来場)
ピアノとパーカッションに
よる
星と愛をめぐるコンサ
ー

第 8 回 2004 年
(講堂、448 名来場)
「みんなで歌いましょう」
の
コーナーが拡充！
入場者数が倍増し、
この年から講堂での開催
になりました。

子どものためのクリスマス・コンサート：12月前半の土曜日、2回公演
アウトリーチ既習生（直近の卒業生たち）の出演



第 6 回

第 3 回 2002 年
(講堂、662 名来場)
初めてのクリスマスは
4 年生が出演。
ハンドベルの練習が大変でし



第 3 回

第 6 回 2003 年
(講堂、1198 名来場)
2 年目から卒業生が出演。
皆で集まって練習するの
が
一苦労でした。

第 30 回 2010 年
(講堂、780 名来場)
初めてのオーディション制
選ばれたグループの
意識の高さは抜群で
大成功でした。
(本紙 1-2 頁参照)

来場者数：1229 名 (2004 年) → 1138 名 (2005 年) → 1277 名 (2006 年)
→ 1111 名 (2007 年) → 753 名 (2008 年) → 818 名 (2009 年)

子どものためのオルガン・コンサート：10月中旬の土曜日、1回公演
 神戸女学院にとって大切な楽器をよりよく理解するために



第26回

第26回 2009年
 (講堂、226名来場)

日本を代表するオルガニスト
 井上圭子先生(本学非常勤講師)
 を
 お招きしました。
 子どもたちもオルガンのパイプ

第15回 2006年
 (講堂、197名来場)

2階の大オルガンと
 1階の中オルガンを駆使！
 舞台上のスクリーンに
 弾く手を映し出しました。



第15回

子どものためのスペシャル・コンサート：10月中旬の土曜日、1回公演
 国内外で活躍する優れた演奏家をお迎えして



第18回

第18回 2007年
 (講堂、365名来場)

「5つの弦楽器&ピアノの
 ゆかいな音楽会」でピアノと
 弦楽四重奏のアンサンブルが
 初めて実現！
 ピアノは佐々由佳里先生。

第7回 2004年2月
 (舞子ピラあじさいホール、
 311名来場)

神戸市民文化振興財団
 アートベンチャーに入選！
 ロシア出身の本学教員による
 ピアノ・デュオの世界を
 お届けしました。



第7回



第20回

第20回 2007年3月
 (講堂、550名来場)

世界的コントラバス奏者
 ゲーリー・カー氏が登場！
 演奏と軽妙なお話で
 聴衆をとりこにしました。

第23回 2008年
 (東京文化会館、328名来場)
 「すてきだね、日本語の歌！」
 本学卒業生の釜洞祐子氏による
 美しい日本歌曲のプログラム。
 子どもたちから詩を公募し
 作曲の先生方が曲をつけまし



第23回

第29回 2010年
 (講堂、330名来場)

東京音楽大学、昭和音楽大学、本学の三大学が
 初の共演。音楽で広がるイメージの世界を
 各大学が個性豊かに実現。
 (本紙6-7頁参照)

今後も「子どものためのコンサート・シリーズ」をお楽しみに！

履修生紹介

四年生（九期生十五名）からの

メッセージ



綾野聖子（声楽）

私はアウトリーチで本当に貴重な体験を得られたと思います。実際に病院を訪問して演奏をしましたが、患者さんが私たちの演奏を聴いて喜んでくれていた姿を見て、私自身が感動しました。アウトリーチの授業で、聴いている人に音楽をどう伝えるかを試行錯誤していく過程が、自分自身にとっての大きな成長に繋がったのではないかと思っています。このアウトリーチで学んだことを今後の音楽活動に生かしていきたいです。



遠藤麻子（ピアノ）

授業では、たくさんのお話を学び、いろいろ気がつくことができました。音楽家は自分の演奏を向上させるのはもちろん大切ですが、それを人に伝える力や人柄も大切だと感じるようになりました。履修を迷う人はいらっしゃいますが、いい経験ができるのでお勧めです。



藤波真理子（ピアノ）

アウトリーチを履修し、自分が演奏するという対して、かに向内的であったかを考えさせられました。

演奏の技術を高めたり、その曲の背景を追求したり、いつも音楽と一対一で向き合うばかりになりがちですが、アウトリーチを履修したことで音楽を通して外に発信する貴重な経験や、新たな音楽のあり方に対する考えを得ることができました。



古山友貴（フルート）

アウトリーチを通して私が感じたことは、自分たちの音楽を社会や人々へアウトプットできる環境をつくれること、音楽が必要とされる幸せです。準備は想像以上に大変ですが、よいものを作りたいたいという皆の思いがあったからこそだと思います。九期生として、学びの場を提供して下さった関係者の方々へ心より御礼申し上げます。



濱野恵里香（ピアノ）

アウトリーチ実習を通して、音楽が好きという思いと仲間と取り組むことで生まれる大きな力を実感しました。また、社会における音楽や音楽教育についても考えることができ、卒業



石原奈緒美（フルート）

後の進路や研究していきたいことを見つけるきっかけになりました。とても大切な大学生活の思い出にもなったので、皆さんも頑張ってください！

アウトリーチの授業では先生や生徒同士で深く話し合うことができましたり、自分たちの考えを活かして工夫を凝らした演奏会を開くことができたりと、他の授業ではなかなかできない経験をたくさんできる貴重な場となりました。



小林聡子（ピアノ）

アウトリーチを履修して実習を重ねていくうちに、今までとは違った面からも音楽を考えるようになりました。聴衆の気持ちを考えてプログラムを組むことや、一緒に音楽を楽しんでもらうことも、思っていた以上にむずかしく、大変なこともありましたが、一年半とても良い経験ができました。関わって下さったすべての方々感謝いたします。



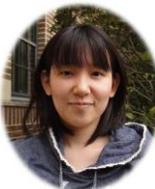
楠瀬由記（声楽）

アウトリーチは私にとって、今後に生きる授業でした。演奏する立場ではなく、聞いて下さる方の立場に立つて、どのような音楽なら楽しめるかなどを考えていくことの重要性を感じました。卒業後、音楽活動をしていきたいのなら、ぜひ履修したらよいと思います。



松井るみ（声楽）

アウトリーチ活動を通して、私たちはたくさんの成長のチャンスを得ました。演奏の機会はもちろん、質のいい音楽をつくること、プログラムをつくる過程での考え方、仲間と協力しあうこと、自分一人ではできないことも先生やセンタールの皆様が支えて下さって、また素敵な仲間がいて可能になります。大変なことも多いですが、折角のこのチャンスを後輩の皆さんに逃してほしくないなと思います。



曾田友子（フルート）

私はこの授業を履修して本当に良かったと思っています。コンクールなどとは違った吹き方や表現の仕方、音楽のすばらしさなどたく

さんのことを学びました。これからも学んだことを活かし、たくさんのお音楽を届けたいです。



砂川奈穂 (フルート)

七タコンサート、幼稚園や小学校での実習はとてもよい経験になりました。本番で子どもたちの表情を見るのが楽しみでした。楽器体験の指導もできてよかったです。こうやってフルートのことを教えながら、子どもたちと関わっていきたいと思います。童謡なども演奏できて楽しかったです。



丹波友里 (ピアノ)

アウトリーチを履修して、音楽の可能性は計り知れないことを改めて実感できました。演奏家はどのようなすれば聴き手に喜んでもらえるかを考えることが大事だと教わりました。音楽と社会を繋ぐ一つのコミュニケーション・ツールであるアウトリーチ活動に携わることができて、すばらしい経験ができたこと心から感謝しています。



恒岡朋代 (ピアノ)

「何を伝えたいのか」「何を感じてほしいのか」「プログラムの柱であるテーマとは？」など、はつきりした目標・目的を持ち、それに見合うプログラムを作成し、さらにやり通す。実習を行う上で、この必ず通る道を築くむずかしさを知りました。同じ時間と空間を共にした履修生のメンバー、実習を支えて下さった方々に心から感謝しています。



矢嶋杏里沙 (ピアノ)

私は演奏会を作りあげることに関して、最初はとても軽はずみな考えでした。選曲のむずかしさや、全体の構造まで事細かく決め、いかにその時その場でベストな演奏会とすることができるとかを考えることは、そんなに簡単ではないと痛感したのを覚えています。でも考えたら考えた分、いろんな可能性が広がったことも事実です。奏者と聴衆との関係がいかに大切かを学べた授業でした。



山下恵里奈 (ピアノ)

みんなが一つのコンサートを作り上げるのは、アイディアがまとまらなかつたりして、なかなかむずかしい面もあります。でも、それを乗り越えてよいものができた時の達成感は、履修生にしか味わえない素敵なものですよ。また、卒業後どのようにして音楽を社会に役立てていけるかも学ぶことができました。皆さん、ぜひチャレンジしてみてください！



「音楽によるアウトリーチ（講義）」を履修した三回生（十期生十五名）



ピアノ

井上朝葵、黒川彩香
松本未来、田邊子

声楽

濱崎希、藤野まり藻、井上美和、
西口千尋、奥野いとし、高井菜摘

フルート

佐野里穂

ハーブ

小原彩乃

ヴァイオリン

伊藤由衣、竹田早希

作曲

櫻井あみ

ティーチング・アシスタント

東瑛子（大学院一年生）

2010 年度実習履歴

7月 4日	(土)	子どものための七夕コンサート
9月 16日	(木)	西宮市立夙川幼稚園アウトリーチ
9月 16日	(木)	神戸市立医療センター中央市民病院アウトリーチ
9月 22日	(水)	国立病院機構兵庫中央病院アウトリーチ
10月 16日	(土)	子どものためのスペシャル・コンサート(三大学連携)
11月 2日	(金)	西宮市立春風幼稚園アウトリーチ
11月 20日	(土)	野木病院アウトリーチ
11月 25日	(木)	長吉総合病院アウトリーチ
12月 11日	(土)	子どものためのクリスマス・コンサート
12月 15日	(金)	雲雀丘学園小学校アウトリーチ
3月 3日	(木)	国立病院機構刀根山病院アウトリーチ

次号のお知らせ (アウトリーチ通信 18号 2011年9月発行予定)

- ♪国立病院機構 刀根山病院アウトリーチ
 - ♪子どものための七夕コンサート
 - ♪卒業生の活動
- その他

お楽しみに！

子どものための クリスマス・コンサート

企画案を公募します！
(6月末日応募締切)

「音楽によるアウトリーチ」既修生を
中心とするグループでの企画を募集します。

詳細は後日 HP にて発表！



音楽をお届けします！！

「アウトリーチ」とは、「一歩踏み出すこと」「手をさしのべること」。

大学やホールといった従来の枠にとらわれずに、社会のさまざまな場にするきな音楽のプログラムをお届けします。

- ♪小中学校へ：総合的学習支援プログラムとして、
 - ♪病院や美術館へ：催しの趣旨に沿った手作りの音楽プログラムを、心をこめてお届けします。
- 子どものための楽しい体験学習を！

お問い合わせは…

神戸女学院大学音楽学部 アウトリーチ・センター (月～金 10:00～15:00)
〒662-8505 西宮市岡田山 4-1 TEL: 0798-51-8584 FAX: 0798-51-8551
E-mail: outreach@mail.kobe-c.ac.jp http://www.kobe-c.ac.jp/musicdp/outreach/

編集後記

祝・子どものためのコンサート第30回開催。支えてくださった皆様に感謝申し上げます。寺澤
来年度も音楽を皆様のより近くへお届けできますように、学生さんと一緒に頑張ります！ 三上
少しずつ慣れてきたので、学生さんともっとコミュニケーションをはかりたいです！ 井上
アウトリーチを始めた年に小学1年生だった息子が今年は高校3年生。早いものです。 津上